

Title	明清時代の女性と演劇(Abstract_要旨)
Author(s)	呉, 宛怡
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2009-03-23
URL	http://hdl.handle.net/2433/123938
Right	
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

(論文内容の要旨)

中国古典演劇史は、創作という面から見ても、また上演という面から見ても、三つの大きなピークを持っている。一つは十三世紀の元代、もう一つは十六世紀から十七世紀、明代後期から清代初期にかけての時期、そして最後が十九世紀後半の清代末期である。本学位申請論文は、そのうち第二の時期に焦点をあて、特に女性と演劇の関係について、三つの視点から解明しようとしたものである。すなわち、この時期の演劇の中で女性たちはどのように描写されているのか、女優はどのようにして出現し、またどのような境遇をあったのか、そして当時の女性たちはどのように演劇と接したのかという三点である。

本論文は、序論並びに六章からなる本論から構成されている。まず、序論では、研究の目的と全体の構成について述べられるが、特にこの時期に、女性が盛んに演劇の主人公として取りあげられたことについて、当時の「主情」説の流行にその理由を求めている。それに続く六章からなる本論の内容は以下のようなものである。

まず、第一章『玉簪記』の折子戯における女性像の変化」では、この時期の演劇に特徴的な女性像の代表例として、『玉簪記』の主人公陳妙常が取りあげられる。中国の古典演劇は通常極めて長大であるので、その上演に際しては、日本の歌舞伎における「見取り」のように、一つの幕のみを全体から切り離して上演するというスタイルが早くに確立された。折子戯と呼ばれるものがそれである。しかもこの時期には、こうした舞台の上でのスタイルを濃厚に反映したテキストが出版されており、この章ではそうしたテキストの分析を通じ、存在感あふれる女性の姿がそこに描かれていることを明らかにした。ここで取りあげられたのは恋愛劇の主人公としての女性であるが、続く三つの章では、「女侠」と呼ばれる一群の女性が分析の対象となっている。

第二章「明清時代の演劇作品における女侠の形象（一）－剣侠の系統に属する演劇作品を中心として－」、第三章「明清時代の演劇作品における女侠の形象（二）－『紅拂女』、『識英雄紅拂莽擇配』、『墨憨齋重定女丈夫傳奇』」、第四章「馮夢龍『墨憨齋重定女丈夫傳奇』における女侠の形象－『女丈夫』、『新灌

園』を中心に」がそれである。「女侠」とは、男性をも凌ぐ胆力を備え、武芸に長じていたり、また人間を見抜く力をもつ、強い意志を持った女性をいう。この時期の作品は、いわゆる才子佳人劇が主流で、そこでの主人公は深窓の令嬢といったタイプの女性が中心であるのに対し、ここで扱われる「女侠」たちは、美しい姿を誇りながらも、強い意志を持つその性格が十二分に描かれている。そこにこの時代の劇作家たちの創作意図を見て取ろうとしたのが、この三つの章である。

一方、第五章「明代の女優及びその境遇」では、演じる側としての女性を取りあげて考察している。この時期には、上の各章で見てきたような多くの個性的な作品が生み出され、またその中で他の時代には見られないような女性像が描かれているのみならず、それを演じる側も、すでに高い職業意識を持つ女優の名にふさわしい人々が出現していたことを、当時の記録をたんねんに検討することにより明らかにした。

続く第六章「明清時期の女性観客と観劇禁制について」は、これまで十分に議論されてきたとはいえない、観客の問題、すなわちどのような人々がどのように演劇を見たか、という点に着目したものである。元代以来、公開の場所において、女性が演劇を見ることについては、風紀を乱すという理由のもとに、しばしば禁令が出されてきたが、その一方で家庭内やサロンにおける演劇の上演を、女性たちは非常な興味を持って見ていた。本章では、このような状況を、当事者である女性たちが残した詩詞作品を細かく検討することにより、解き明かそうとしている。

このように、本論文では、演劇作品中におけるこの時代特有のものといえる女性のさまざまな形象のみならず、当時の女性がどのように演劇と関わりを持ったのかという点が、明らかにされているのである。

(論文審査の結果の要旨)

詩とりわけ抒情詩と散文とは、中国の文学史にあつて常にその代表的な地位にあつたが、これらのジャンルで女性の姿が細かく描かれることは稀であつたし、その創作やあるいは享受といった点でも男性がその中心であつた。これに対し、女性の姿を極めて積極的に描こうとしたのが、宋元以後、急速に発展した演劇であり小説である。とりわけ十六、十七世紀明代後期から清代初期にかけての演劇作品は、「伝奇十部九相思」(十の芝居のうち九つは恋物語)といわれるほど、男女の愛情を描くものが多い。

本学位論文は、こうした時期における演劇作品と女性との関わりを解明しようとしたものであり、序論と全六章の本論からなっている。まず、取りあげられるのは、『玉簪記』という作品であるが、この作品はその原作が十六世紀半ばに成立し、当時さかんにもてはやされたばかりでなく、上演用の台本に基づいたと考えられる「折子戯」のかたちのテキストが数多く現存している。本論文では、こうしたテキストをたんねんに比較しながら、原作に見られる主人公の姿が、上演用テキストの中でより存在感のある女性へと変化してゆくことを解明している。

次に続くのは、「女侠」と呼ばれる、強い意志に基づいて行動する女性たちが、演劇の中でどのように描かれるかという分析である。こうした女性たちが、文学の素材となるのは、この時期の演劇がその最初というわけではなく、唐代の小説の中にすでにその姿を現している。著者はまず、こうした唐代の作品、例えば『紅線』や『聶隱娘』といった作品の中での女侠が、女性でなければならないという性格を必ずしも与えられているわけではなく、いわば中性的な描写に終始しているのに対し、明清時代の演劇作品が、極めて具体的に女性らしさを描いていることに着目する。そして、こうしたイメージの変化の根底にあるものとして、本来これらの作品が舞台の上で生身の女性たちによって演じられたものであることを重視しなければならないと結論づけている。

とりわけ第四章では、文学創作や出版の面で幅広い活動を行い、この時代を代表する知識人と目される馮夢龍による『女丈夫』と『新灌園』という二つの

氏名	吳宛怡
----	-----

作品をたんねんに分析している。この二作品は、それぞれ先行する作品があつて、それを馮夢龍が改作したものであり、従来低い評価しかされていなかった作品であるが、それぞれ主人公となっている「女侠」紅拂と太史敷女の形象に、一見したところ先行作品を踏襲しながらも、独自の観点に基づく改変が加えられていることを明らかにした。これらの論考は、従来の研究にはない視点からのものであり、興味深い結論を導き出しているといえよう。

第五章は、演じる側の問題を扱ったもので、特に万暦年間（1573～1620）において女優が出現してくる過程と、彼女たちが当時の演劇界ではたした役割について論じたものであり、また続く第六章では、女性たちはどのように演劇を見たのか、という問題をあつかっている。

本論文に一貫するのは、当時の演劇に女性がどのように関わり、またそれが演劇作品にどのような影響を及ぼしたのかという視点である。申請者の議論にはやや冒険的な面が見られるが、演劇のみならず伝統文学全体にわたるこうしたジェンダー論的な視点からの再検討は、やはり大きな意味を持つと思われる。申請者にはそうした視点から、さまざまな作品を読み解くのに十分な力量が備わっていると評価できよう。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。平成21年2月6日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。